2014年10月1日

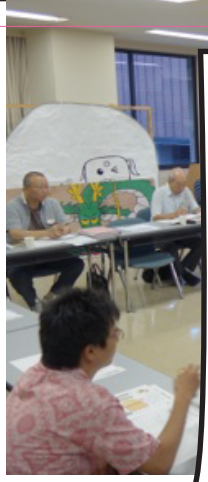
A4一枚で伝える

大阪教区教化体制策定委員会発行

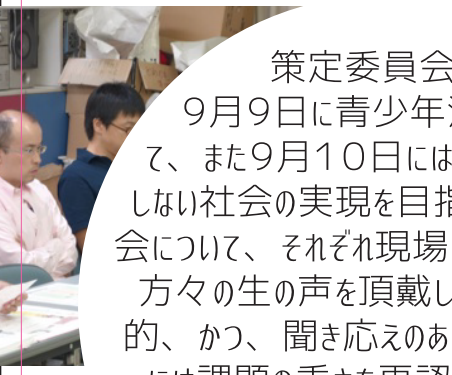
策定ホットライン

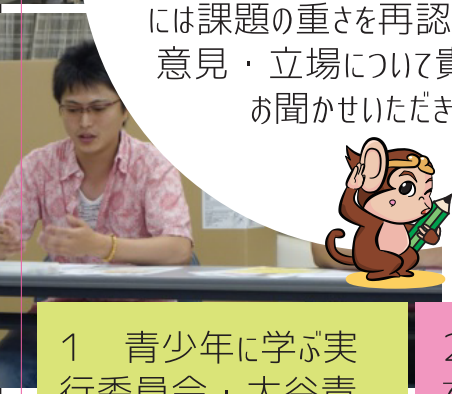
引き続き…　第3号

教区の声を聞く



策定委員会では9月9日に青少年活動について、また9月10日には原発に依存しない社会の実現を目指す実行委員会について、それぞれ現場で活躍されている方々の生の声を頂戴しました。具体的、かつ、聞き応えのあるご意見、さらには課題の重さを再認識させられるご意見・立場について貴重なお話をお聞かせいただきました





1　青少年に学ぶ実行委員会・大谷青年会に参加。思うことは「なかなか人が集まらない」、直接一つの寺に声をかけにくい、ということを実感。

2　さまざまな行事の中で教区と連携できればいいと思いながら、踏み込みにくい。

3　答申にある「人材不足」「理解の不足」「アピールの不足」は、15～16年前からの課題。各組長に出向いて活動のアピールもしたことがある。その時青少年活動の認識が低いと感じた。

4　同じ目的を持つ団体がどうしてこれほど多く有るのか疑問。また、かつては教化委員会の中に青少年はあった。それを切り離してきた経緯がある。研修講座部の中に実行委員会が生まれたのはそういう背景がある。

5　実行委員会のショートフィルム班で、第1組・第5組・第7組・第9組・第10組・第11組・第14組・第17組などを回った。実際に回るとそれぞれの組や土地事情で現場では回っている。

6　チラシによる呼びかけの周知効果の限界を感じる。口コミは威力がある。会員の一本釣りにも限度がある。

7　谷青は、15歳～30歳という年齢制限を持ち、卒業していくという性質がある。新しい人を呼び込む方法が確立されていない。教区としても勿体ないことばかりである。全寺院発送ではなく、個人名で案内を送りたい。

8　経済的にお寺自身が潤っていない所は、若い人で仕事をしているケースが増えた。

9　一本釣りというが、友が友を呼ぶという形なので、一本釣りも良いかも知れない。

10　児連としてはブットンくんという強敵が現れた。

11　教区の若い人に青少幼年活動を義務化してみてはどうか。

12　人材不足というよりも、アピールの仕方・方途に課題がある。

13　青少幼年の各団体が人の取り合いになっている。細分化しすぎなのではないか。

14　青少幼年活動として教区に出て行くと、教区に使われているように見られる。住職の所で情報がとまってしまう。一般職に就くと参加が難しい。

大谷青年会、仏教青年会、児童連盟、青少幼年に学ぶ実行委員会からのお声の一部です！

9/10・原発に依存しない社会の実現を目指す実行委員会からの声

「答申」に示された「社会部の設置」という提案文面と組織図（案）を確認、また2011年8月3日の教区会決議文を朗読の後、各委員さんよりご意見を賜りました

冒頭、原発に依存しない社会の実現を目指す実行委員会の皆さんに、策定委員より新教化体制の組織図（案）について説明がありました。答申に示された組織図は現行の組織図と大きくは変わっていないように見受けられますが、実は人員構成について大きな変革があることです。それは「実行委員の中から専門部員を組織し、さらに専門部をもって企画部会を組織する」ということです。そのためにはこれまで課題別に組織されてきた実行委員会を、さらに大きな目的で集約してゆく必要があるという方向性を示させていただき、ご意見を賜ったわけです。

1 教区会決議について、当初門徒会は原発に依存しない社会の実現を目指す委員会決議を承認していなかった。それは門徒の方の職業に電力関係があるということへの配慮でもあった。

2 ここ数年の動きをみれば、ホームステイにしても当初は27ヶ寺。今は頼み込んでも10ヶ寺あるかないか。受入先もいつもおなじ。決議文を出した時の意識と、今の意識は明確に変化してしまっている。現状を鑑みてゆくということを観点として持つならば、たとえば私は社会部という形が生まれ、その中に入る方が現実的だと感じる。どう言う組織になるかはわからないが、常にいろんな問題にシフトしながら人が関わってゆく、触れてゆく、この発想は非常によいと感じる。

3 社会部として教化委員会内に入るという体制になってしまうと下ぶくれになってしまわないかという危惧がある。教区会で承認されたということは全寺院に責任があると思う。全寺院が取り組む姿勢が必要だ。

4 小浜の原発原告団の代表者が言われたが「我々は無関心ということで賛成してしまった」ということ。無関心の賛成。無関心を解消する努力。賛成・反対ということではなく、立場上言えない人もいるわけで、自分として何ができるのかという問題。そのような自発性・自主性が社会部にも保持されればと思う。

5 組織は常に変わってゆくものであると思う。固定されると組織は衰退する。都度発展性をもつ組織作りをすべきだろう。メリットデメリット多々あっても、やってみなければわからないでしょうと思う。やってみるべき。

6 社会部を設置することで我々は如何に広い課題に面しているかという濁世の自覚が必要だ。門徒に広く、世の中の課題を知って貰うと言うことが大切ではないか。専門家ではなく、広く伝えてゆく、知っていただくということが大切ではないか。やるべきことは多々あるだろうけれど、複数の関わりで広い視野と意識をもっていただけるとよりよいのではと感じる。

7 課題を追求すれば専門家が生まれる。これまでそういう学びをしてきただろうか。今こそ社会問題への専門家が必要なのではないか。社会部の設置により、課題意識を持った方を育成する姿勢も大切だと感じる。

策定委員会